

機関により運転操業したが、前述の経緯により、三〇年八月、寺西武雄にこの工場は譲渡され、寺西により経営されることになった。

工場も電力を導入し運転され、原木の供給は、金山営林署、東大演習林などから受け、製品の販路は、東京、大阪、札幌、小樽方面であった。

製材界も、昭和三〇年代後半から、大型施設の耐火構造が普及し、製材需要は減少の傾向をみせ、加えて、原木供給にも有限説が出始め、木材価格は高騰し、製材生産にも制限を余儀なくされ、経営の合理化に迫られる結果となり、四〇年一〇月三一日、下金山における三五年間の製材の歴史を閉じた。同年一一月一日に下金山木工場、石川組木工場、金山木工場の三者により株式会社金山木工場を設立、経営の合理化、統合を果たしたのである。

**石川組木工場** 戦後の人口増加と諸制度の改革によって、住宅はもとより、学校その他の諸施設の建設が進められ、本村の木材業界も活況を呈し、製材需要の急速な成長に対応し、木工場などの創業をみるに至った。

昭和二五年三月二三日、前記の会社施設を買い受け、株式会社金山木工場を創業した。創立者は山岸与平と寺西武雄で、資本金は一〇〇万円であった。

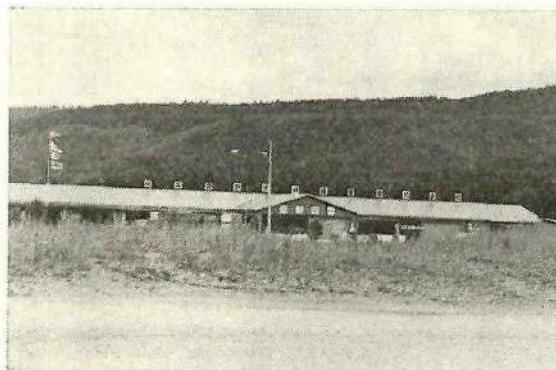
原木は、金山営林署から年間立木約二万石、素材八〇〇〇石の払い下げを受け、製材一万五〇〇〇石の生産を揚げ、製材需要に対応し、順調な操業を続けたが、三一年三月三一日、火災により工場、吹抜約二二〇坪を焼失した。しかし、同年七月一五日には、工場、吹抜一九〇坪を再建新設し、資本金を三〇〇万円に増資した。代表取締役山岸与平、取締役寺西武雄、館内猛、金尾貫治、監査役愛須為吉が就任した。従業員は約三〇名、造材期には季節労働者を約七〇名雇用、購入資材は地元業者に依存しており、造材費用の約四〇%は地元へ還元された。

原木の供給は、金山営林署から受け、製材は主として、札幌、赤平、岩見沢、石狩太美、小樽へ出荷した。

しかし、この工場も、前述の経済情勢下にあって統合を余儀なくされ、昭和四〇年一〇月閉鎖となり、金山で製材事業の一翼を担った木工場の姿は消えることとなった。

### 金山木工場

この木工場の前身は、昭和二〇年五月一〇日創立の金山木材工業株式会社で、初代社長は多東清吉であり、二代社長には小泉恒吉が就任、専務取締役は太田末吉であったが、二四年三月三一日に解散した。



南富良野木材産業株式会社

原木は、金山、幾寅両営林署から供給を受け、道有林からも補充を受けた。製品（ひき角、ひき割、板、チップなど）の販路は一円で、本州は東京、横浜、青森方面へ移出した。

昭和四〇年一一月一日、下金山木工場、石川組木工場の二工場と金山木工場の三者が合同し、株式会社金山木工場を資本金八〇〇万円をもって創立した。取締役会長山岸与平（幾寅）、代表取締役寺西武雄（下金山）、専務取締役金尾貫治（金山）、常務取締役石川一男（金山）、同上新谷三郎（下金山）、取締役館内猛（金山）、同上寺西勇（下金山）、監査役愛須為吉が就任した。

昭和四三年一月二九日、社名を金山木材株式会社に変更した。

製材業界も、長期にわたる木材需要の停滞、価格の低迷や、反面、労賃、資材費などの上昇により経営は厳しく、製材の生産にも制限を余儀なくされる情勢となり、昭和二〇年来、戦後の経済混乱期を背後の資本力で乗り切り、前記の歴史的変遷を経て、五九年一二月一四日廃止解散したが、この木工場が地域振興ひいては町発展に貢献した足跡は大きい。

**南富良野木材産業株式会社** 当会社の前身は、千葉木材幾寅木工場である。昭和二〇年一二月二〇日、本村の豊富な森林資源と金山、幾寅両営林署の所在に着目した帶広の千葉木材合資会社社長千葉義雄が、上富良野の伊藤七郎右エ門経営の伊藤木材を買収、資本統合を図り、幾寅へ進出し、千葉木材幾寅木工場を創立したものである。

当時、原木は幾寅営林署から供給を受け、年間三万五〇〇〇石の製材を目標とし、四万石の造材を行う一方、不良木皆伐の跡地に年間一〇〇町歩の造林も施行した。工場長は千葉茂で、製材の販路は、帯広、旭川、札幌及び東京、名古屋、大阪、広島そして遠くは福岡方面であった。

昭和四一年四月五日に千葉林業株式会社と社名を変更、四四年四月三日、資本金を六〇〇万円に増資、同年七月一七日、帯広市から本店を移転、五〇年七月二日には南富良野木材産業株式会社と社名を変更した。五四年五月一日に資本金を二〇〇〇万円に增资した。

歴代工場長、社長は、千葉茂、武田十五、三津橋泰次郎で、現在は代表取締役三津橋貞夫である。以下、昭和六〇年の現況は、次のとおりである。

業務内容 製材、チップ、素材の製造販売

造林造材、土木、除雪、建築請負